

複文のアスペクトそのほか

井島 正博

はじめに

筆者は、井島（二〇一九・三）において、三原（一九九一・三、九二・一一）に提示された複文のテンスに関する“視点の原理”を批判的に検討し、確かにそれに近い原則が成り立つが、それは結局、独立した“原理”ではなく、絶対テンス、相対テンスの機能に還元されることを示した。ただし複文にもさまざまな類型が見出されるが、それぞれの類型ごとにさらなる制約が加わると考えられた。そこで井島（二〇二一・三）では同一名詞連体節を含む文に関して、井島（二〇二二・三）では逆接確定・順接仮定・逆接仮定条件文に関して、井島（二〇二二・五）では順接確定条件文に関して、井島（近刊）では同格連体節あるいは引用節を含む文に関して制約を確認した。これ以外にも複文の類型が存在しないわけではないが、これでおおよそ代表的な複文に及ぼされる制約

に関して検討したと考えられる。

さて、これまで“視点の原理”に関しては、それにあてはまらない文が見出されることが指摘されてきた。筆者も複文のテンスに関して検討を加えてきた過程で、そのような問題に直面して、どのように対処したものか検討を余儀なくされてきた。しかるにさまざまな例外的用例におよそ共通して、従属節と主節とが同時、あるいは時間的に重なりがある場合にイレギュラーが生ずることが見て取れた。そこで本稿では、そのような場合に、絶対テンス、相対テンスの機能以外にどのような働きが関わっているのか検討を加えたい。

1 複文に用いられるテイル

1・1 従属節・主節・発話時が同時である文類型

従属節と主節および発話時という三者の時間関係を考えると、同時である場合には次の四者が考えられる。

① 従属節⇐主節⇐発話時

① 従属節⇐発話時（主節⇐従属節⇐発話時あるいは従属節⇐発話時⇐主節）

② 主節⇐発話時（従属節⇐主節⇐発話時あるいは主節⇐発話時⇐従属節）

④ 従属節⇐主節（発話時⇐従属節⇐主節あるいは従属節⇐主節⇐発話時）

これらの場合、原則としてテイルが用いられるが、ここで用いられるテイルはアスペクトを表わしていると考えられる。本稿では、アスペクトは基準時において動作の展開のどの段階であるかを表わすシステムであると考ええる。また、従属節・主節にタが用いられるかどうかは、これまで論じてきたように、テンスの問題と扱うことにしたい。まずそれぞれについて簡単に見ていくことにしたい。

まず、①の場合、すなわち(1) a・bのように、従属節⇐主節⇐発話時である場合が見出される。

(1) a 子供たちが回っている独楽を一心に見つめている。

b 聴衆は講演している講師の話に聞き入っている。

このように、従属節⇐主節⇐発話時の場合、従属節にも主節にもテイルが用いられるが、その基準時は、従属節・主節いずれのテイルも発話時である（あるいはすぐ後で見るように、主節のテイルの基準時は発話時だが、従属節のテイルの基準時は主節であるとも考えられる）。テンスの観点からは、Φが用いられる（すなわちテイルであってテイタは用いられない）。

次に②の場合、すなわち従属節⇐発話時の場合は、従属節にテンス的にはΦであるテイルが用いられ、(2) aのように、主節がタであり主節⇐従属節⇐発話時のものも、(2) bのように、主節がΦであり従属節⇐発話時⇐主節のものも見出される。

(2) a 現在大英博物館に保管されているロゼッタ・ストーンはかつてイギリス軍がエジプトから持ち帰った。

b 現在大英博物館に保管されているロゼッタ・ストーンはいずれエジプトに返還されるだろう。

この従属節に用いられているテイルの基準時は発話時であると考えられる。

その次に③の場合、すなわち主節⇐発話時の場合は、(3) aのように、従属節がΦであり主節⇐発話時⇐従属節のものも、従属節がタであり従属節⇐主節⇐発話時のものも見出されるが、いずれも主節はテンス的にはΦであり、アスペクト的に

はテイルが用いられる。

(3) a 田中氏から寄贈される本をリストアップしている。

b 田中氏から寄贈された本をリストアップしている。

ただしこれらの場合は、従属節⇨発話時の場合は従属節にテイルが用いられ、主節⇨発話時の場合は主節にテイルが用いられる以外のテンスの振る舞いは、筆者のこれまでの稿で論じたことの中に解消される。

そして最後に④の場合、従属節⇨主節の場合がある。そのうち従属節⇨主節⇨発話時の例は岩崎（一九九八・四）では順接確定条件文の例として挙げられているが、同一名詞連体節においても同様に、従属節ではテイルが用いられるが、Φでもタでも意味的には大きな違いは見られない（場合がある）。

(4) a 太郎は前の席に「いる／いた」女の子に話しかけた。

b 私は隣に「座っている／座っていた」人に道を尋ねた。

ここで従属節のテイルの基準時は主節と考えざるをえない（①の従属節⇨主節⇨発話時の場合も、従属節⇨主節が含まれているので、この解釈も可能であると考えられる）。すなわち、④の類型は、従属節のテイルの基準時が主節である点、従属節がタでもΦでもあまり意味的な違いが見出されない（場合がある）点において他の類型とは異なっている。しかし他方、従属節にテイルが用いられるという点においては、②の類型と共通しており、従属節にテイル（テンシ的にはΦ）

が用いられる場合には、②の場合も④の場合もあることになる。

また、(5) a・bは従属節⇨主節の例のようにも見えるが、

(5) aでは「学生に注意した」時点ではまだ「学生」は「さわいでいた」のであり、(5) bではドクター・Rの話を注意を戻した「時点ではまだ「ドクター・Rの話」は続いていたという意味で、従属節⇨主節を含んでいる。

(5) a 先生は、さつきから「さわいでいる／さわいでいた」学生に注意した。

b 私は先刻から「始まっている／始まっていた」ドクター・Rの話を注意を戻した。

ちなみに、従属節にも主節にもテイルが用いられていても、①の従属節⇨主節⇨発話時ではなく、この④の類型に属する場合がある。たとえば(6) a・bは、従属節⇨主節⇨発話時を表わしており、主節のテイルは(7) a・bのように言外に基準時を持つていると了解される。

(6) a 子供たちが回っている独楽を一心に見つめていた。

b 聴衆は講演している講師の話に聞き入っていた。

(7) a 山田が通りかかると、子供たちが回っている独楽を一心に見つめていた。

b 田中が途中で入場した時、聴衆は講演している講師の話に聞き入っていた。

他方で、発話時⇨従属節⇨主節の場合には、従属節ではΦ

は用いられるがタは用いることができない。

(8) a 道に迷った時は近くを〔歩いていて／＊歩いていた〕

人に道を聞きなさい。

b 天気予報によると、明日の遠足は〔降っている／＊降っていた〕雨の中を歩くことになりそうだ。

以上見てきたように、従属節と主節とが同時である場合が、他の類型とは異なつて独特な振る舞いをするのが了解された。次にこの④の類型に関してさらに考察を進めることにしたい。

1・2 従属節と主節とが同時である文類型

まず、④の類型に入ると思われるにも拘わらず、従属節Ⅱ主節ではないように見える文がある。(9) a・b の従属節にはテイルが用いられているが、時間関係は従属節↓主節↓発話時であり、どうしてテイルが用いられているか、説明がしがたい。

(9) a 花子は道に落ちていた財布を交番に届けた。

b 夫婦は生け簀を泳いでいる鯛を刺身にしてもらった。

しかしこれらの場合、どうやら途中の段階が省略されているように思われる。すなわち、(9) a では「財布を見つけて拾う」という段階が、(9) b では「その鯛を注文する」と言う段階がはしられているように思われる。すなわち(9) a は潜在

的には主節には「財布を拾う」が隠されており、その時点で従属節の「財布が落ちている」が成立していたと考えられる。

また、(9) b は「鯛が生け簀を泳いでいる」は「刺身にしてもらう」に先行しているように見えるが、潜在的には主節には「注文する」が隠されており、その時点で「鯛が生け簀を泳いでいる」が成立していたと考えられる。

(10) a 花子は道に落ちていた財布を〔拾って〕交番に届けた。

b 夫婦は生け簀を泳いでいる鯛を〔注文して〕刺身にしてもらった。

以上のような特徴を踏まえつつ、従属節Ⅱ主節↓発話時の場合、いつでも従属節のΦとタとが置き換え可能というわけではないことについて検討を加えたい。まずテイタが自然でテイルの許容度が落ちる場合は、従属節事態が「たまたま・偶然」あるいは思いも寄らないことであるなど、主節主語人物にとって予想できなかった事態であるような場合である。

(11) a 犯人は部屋を出てきたところを、〔待ち構えていた／？待ち構えている〕警察官に捕縛された。

b 花子は〔落ちていた／？落ちている〕財布を交番の届けた。

c 太郎は〔転がっていた／？転がっている〕空き瓶を踏みつけて転んだ。

一方で、以下のような場合は、まさにその場にいるような臨場感を感じさせる。

(12) a 太郎は「沸騰している／？沸騰していた」お湯をコー

ヒーメイカーに注いだ。

b そのアイドルは「興奮している／？興奮していた」フアンたちを目の前にして呆然とした。

c 客は生け簀を「泳いでいる／？泳いでいた」鯛を刺身にしてもらった。

これらのことは、前者は「外観的」な表現であり、後者は「内観的」な表現であることを推測させる。すなわち、外観的表現の場合、主節主格人物の認識に拘わらず、事実を淡々と述べる表現であるために、主節主語人物が予想していない事態を従属節にとることに結びつくように思われる。それに対して、内観的表現の場合、主節主格人物が意図的に行う、あるいはその人物の認識の範囲で行う行為に関わる内容を従属節にとるように思われる。

ちなみに井島（二〇二一・三）では、同一名詞連体節を含む文において、タ／タの文とΦ／タの文とは、ともに主節↓従属節↓発話時という時間関係を表わすことを見た。ただし、相互に置き換えることはできなかった。

(13) a 越前海岸で「自殺した／＊自殺する」女性はそのへ行くのにタクシーを使った。

b きのう強制捜査を「行った／＊行う」検察官と、容疑者はおととい会った。

(14) a 生まれて「くる／＊きた」子どもの服を買ったんです。

b 「出場する／＊出場した」マラソン大会のために充分練習した。

すなわちここには、意味的な対立があり、タ／タの場合は「外観的」、Φ／タの場合は「内観的」な意味となった。そのために相互に置き換えは不可能となることを確認した。

主節↓従属節↓発話時を表わす、従属節にテイル／テイタをとる同一名詞連体節を含む文も、主節↓従属節↓発話時を表わす、従属節にΦ／タをとる同一名詞連体節を含む文も同じような振る舞いをする。しかしながら、主節↓従属節↓発話時を表わす文の場合は、外観的な場合には従属節にタをとる、内観的な場合には従属節にΦをとって、置き換えは原則として不可能であったのに対して、主節↓従属節↓発話時を表わす同一名詞連体節をとる文の場合は、従属節のΦとタとは置き換え可能な場合も存在することが指摘されている。このことはどう考えればよいだろうか。

「外観的」な複文とは、出来事の起こった順序で「客観的」に描写するような文であるが、従属節と主節とが同時であるような場合は、典型的な「外観的」表現とはいえない。他方で、「内観的」表現とは、当事者の立場から、ある出来事を動機として、ある行為を行うような表現のことであるが、これも従属節と主節とが同時であるようなものは、典型的な「内観的」表現とはいえない。たとえば(4) a・bは単に事実の報告として「外観的」表現であると了解することもでき

そうだし、たまたま「前の席にいる」「隣に座っている」のをきつかけとして「話しかけた」「道を聞いた」というように「内観的」表現と了解することもできそうである。このように、従属節Ⅱ主節の場合は、「外観的」／「内観的」という意味対立が中和する、あるいは明確に区別したい環境であるために、Φ／タが置き換え可能である場合が見出されるものと思われる。しかし他方で、先に見たように、文の内容によって、「外観的」な解釈がふさわしい場合には従属節にテイタを用いる方が許容度が高く、「内観的」な解釈がふさわしい場合には従属節にテイルを用いる方が許容度が高くなるものと思われる。

次に、発話時↓従属節Ⅱ主節の場合には、従属節ではΦは用いられるがタは用いることができなかった。

- (15) a 道に迷った時は近くを（歩いていて／＊歩いていて）

人に道を聞きなさい。（Ⅱ(8)a）

- b 天気予報によると、明日の遠足は（降っている／＊降っていた）雨の中を歩くことになりそうだ。（Ⅱ(8)b）

ちなみに、井島（二〇二一・三）で示したように、Φ／Φとタ／Φとは、ともに発話時↓従属節Ⅱ主節という時間関係を表わす場合があるが、置き換えは不可能である。

- (16) a 来年度優秀な修論を（＊提出する／提出した）人だけを博士課程に進級させよう。

- b 来週の試験で英語がトップ（＊である／だった）人を

採用しよう。

- (17) a 今度（転居する／＊転居した）人は、転居後に住民登録をするらしい。

- b 来週（お会いする／＊お会いした）先生は、近々大著を出すそうだ。

そしてこの場合にもΦ／Φとタ／Φとは意味的な対立があり、タ／Φの文の場合には従属節は「未特定」という特徴を持ち、Φ／Φの分の場合には従属節は「既特定」という特徴を持つと論じた。

しかるに、発話時↓従属節Ⅱ主節の場合には、従属節と主節とが同時なのであるから、「未特定」ということはありえない。したがってテイルのみが許容され、テイタは用いられないということになると思われる。

2 それ以外に従属節Ⅱ主節でイレギュラーが生ずる場合

前節では、従属節Ⅱ主節であり従属節にテイルが用いられた場合にイレギュラーが生ずるのはどうしてなのかに関して検討を加えた。しかしこれまでも所謂「視点の原理」に対するイレギュラーな振る舞いの検討はいくつも見出されるが、その多くが従属節Ⅱ主節の場合に生じていた。本節では本稿の立場から改めて検討を加えたい。

2・1 同一名詞連体節を含む文の特殊例

① 繰り返し型・② 修飾節繰り返し型・③ 近接型――

大島（二〇〇八・三）において、「視点の原理」にあてはまらない同一名詞連体節を含む文の類型は、いずれも Φ/Δ の以下の三つであった。ただし、大島（二〇〇八・三）では同一名詞連体節に限って論じているので、そこで「修飾節」と呼んでいるものは、本稿では「従属節」と読み換えることになる。

さてそこで論じられるのは、同一名詞連体節を含む文において、 Φ/Δ という形の文で、従属節 \downarrow 主節 \downarrow 発話時を表わす文の類型である。ちなみに、「視点の原理」および筆者の枠組では、 Φ/Δ の文は、従属節の Φ が絶対デンスを表わすとしても、相対デンスを表わすとしても、従属節 \downarrow 主節 \downarrow 発話時を表わすことはない。

① 繰り返し型

「修飾節事態と主節事態との間に恒常的な関係が成立する場合」であり、従属節 \downarrow 主節の関係が反復される場合である（大島（二〇〇八・三）では、(18)cは Φ/Φ すなわち文末は

- (18) a このレストランに来る人は必ずハンバークを注文した。

b 郵便局に行く人はみんなその切手を買った。

c あの監督が撮る映画は必ず客がたくさん入った。

② 修飾節事態繰り返し型

「修飾節事態が繰り返されていると解釈できる」場合であり、従属節のみが反復され、従属節 \downarrow 主節となる場合である。

- (19) a 小澤先生は旅先で見つける昔話を一冊の本にまとめた。

b 田中さんは畑で収穫する野菜でこの晩ご飯を作った。

③ 近接型

「修飾節事態は主節事態が生起するその時点まで持続しており、修飾節事態が持続しているところへ主節事態が生起する」場合である。

- (20) a 相手チームが必死で守るゴールに彼はいつも簡単にボールを蹴り込んだ。

b 賃上げをせまる組合員たちを社長は一言で黙らせた。

確かにこれらの類型は、従属節 \downarrow 主節 \downarrow 発話時という時間関係となっており、従属節の Φ を絶対デンスとする解釈（従属節 \downarrow 発話時）も、相対デンスとする解釈（従属節 \downarrow 主節）もどちらも成立しない。それではこれらはどのように考えればよいのだろうか。

まず繰り返し型、修飾節繰り返し型に関しては、従属節が一時的な事態ではなく、反復される事態であることが、原則として一時的な事態同士の関係を問題にするデンスシステム

から逸脱している。「反復・繰り返し」をアスペクトの領域であるとするれば、従属節と主節とのタ・Φのとりかたは、テンスのシステムに従わなくてもよいことになる。

まず、①の文に関しては、Φ／タの文を、Φ／Φにしても不自然さはまったくなく、前者は過去の習慣・反復、後者は現在の習慣・反復という解釈になる。

(21) a このレストランに来る人は必ずハンバーグを注文する。

b 郵便局に行く人はみんなその切手を買う。

c あの監督が撮る映画は必ず客がたくさん入る。

すなわち、繰り返される事態「前件↓後件」全体が過去であれば文末すなわち主節にタが用いられ、現在であればΦが用いられるということのようである。実際、「前件↓後件」全体をひとまとめにして、「習慣・行動・傾向」とまとめるような表現が可能である。

(22) a このレストランに来る人は必ずハンバーグを注文するという習慣がある。

b 郵便局に行く人はみんなその切手を買うという行動に注目した。

c あの監督が撮る映画は必ず客がたくさん入るという傾向が見られた。

ただし、これらはいずれも従属節にタを用いた表現も可能である。こちらの場合、従属節のタには相対テンスが働いて

いると了解できる。

(23) a このレストランに来た人は必ずハンバーグを注文した。

b 郵便局に行った人はみんなその切手を買った。

c あの監督が撮った映画は必ず客がたくさん入る。

次に②に関してであるが、大島（二〇〇八・三）がこれを①の亜種であると論じているように、この場合は従属節の事態のみが習慣・反復されるということになる。ただし、これをΦ／Φの文にすると、反復・継続という意味が消失してしまう（か、①のように全体として繰り返される習慣・反復と解釈される）。

(24) a 小澤先生は旅先で見つける昔話を一冊の本にまとめる（つもりだ）。

b 田中さんは畑で収穫する野菜で晩ご飯を作る。

さらにこの場合も、従属節をタにすれば、習慣・反復といった意味あい消失して、原則として一回的な事態を表わすようになる。

(25) a 小澤先生は旅先で見つけた昔話を一冊の本にまとめた。

b 田中さんは畑で収穫した野菜でこの晩ご飯を作った。

また、①の文類型も②の文類型と同じように、従属節事態だけでも反復される事態であることは、従属節のみを単文として独立させることができることから了解される。

(26) a このレストランには多くの人が来る。

b 多くの人が郵便局に行く。

c あの監督は何本もの映画を撮る。

(27) a 小澤先生は旅先で多くの昔話を見つける。

b 田中さんは畑で沢山の野菜を収穫する。

最後に③について、従属節事態は、主節事態が成立した時点まで継続する、あるいは直前に成立した事態である。そのために過去としてタが用いられることなく、主節事態が成立した時点でも直前の事態としてΦが用いられるというのである。

(28) a 相手チームが必死で守るゴールに彼はいとも簡単にボールを蹴り込んだ。

b 賃上げをせまる組合員たちを社長は一言で黙らせた。

これらの従属節のΦもタに置き換えることは可能であるが、そうすると時間的な切迫感がなくなり、客観的な描写をしているような印象を与える。

(29) a 相手チームが必死で守つ(てい)たゴールに彼はいとも簡単にボールを蹴り込んだ。

b 賃上げをせまった組合員たちを社長は一言で黙らせた。

以上見てきた、同一名詞連体節における、Φ/タの形で従属節↓主節↓発話時の時間的意味関係を表わす文は、絶対テンス・相対テンスの仕組みには反するように見えるが、①の

場合は一回的に従属節が主節に先行することではなく、従属節が主節に先行する事態が反復するということを表わすために、絶対テンス・相対テンスの仕組みから解放され、②の場合も、従属節のみではあるがその事態が反復されることにより、従属節事態を過去とも現在とも時間軸上に特定できないことになると考えられる。さらに、③の場合は客観的な事態同士は従属節↓主節であるかもしれないが、認識上は同時とみなされるように思われる。前二者は、習慣・反復を表わすことによって、特定の時間に位置付けることができず、そのために例外的な振る舞いをするのに対して、第三の場合は、従属節と主節との事態が認識上、同時と了解されるために従属節がΦも可能であるというものであった。

2・2 順接確定条件文の特殊例1

― 従属節が反復を表わす場合 ―

岩崎(一九九四・一二)では、Φ/タという形態で、従属節↓主節↓発話時という時間関係を表わす表現について検討している。Φ/タという形の順接確定条件文は、従属節のΦが絶対テンスであれば主節↓発話時↓従属節を表わし、相対テンスであれば主節↓従属節↓発話時を表わすのが原則であり、従属節↓主節↓発話時を表わすのは特殊な場合であると考えられる。

(30) a 今西栄太郎は、妹が帰るといので、駅まで見送つてやることにした。

b 最初は誰だかわからなかった。アパートのおれの部屋のドアをノックするから、開けて廊下を見ると、顔一面にベタベタ白いものを塗りたくった妙な男が立っている。

c 当の私が落ちて着いているのに、関係のない彼女が泣くのでびつくりした。

この特殊な構文が成立するためには、以下の語彙的特徴と統語的特徴が成り立つと論じる。

・語彙的特徴

ノデ節、カラ節内の述語が、過程をもつ動きをあらわす動詞である。

(ここで、「過程をもつ」とは〈継続〉のことである)

ただし、「過程をもたない動きをあらわす動詞でも、様態などをあらわす副詞と共起するとルノデ／ルカラ(従属節事態先行型)が可能になることがある」という。

(31) a *彼が家に来るので、驚いた。

b 彼があんまり突然家に来るので、驚いた。

・統語的特徴

従属節の主語と主節の主語が異なっている。

さらにどうしてそのような二つの特徴があるのかを検討した結果、以下のような性格にまとめられるという。

・ルノデ／ルカラ(従属節事態先行型)の文

①ノデ節、カラ節に示されている事態は、主節の主語なる人物による観察を表している。

②主節の主語なる人物はその観察を主節にさしだされる動作の理由としている。

この二つの条件は、「観察」という述語を「認識」に変更すれば、井島(二〇二二・五)で論じたように、そのままで動機・行為関係の条件と了解することができる。ちなみに、ここで言う「認識」は、ここで言う眼前の状況の直接的な「観察」の他に、〈経験〉〈目的〉〈意図〉〈予定〉〈予想〉〈仮定〉などを含んでおり、挙げられている事態は過去・現在・未来いずれの場合もありうるものである。ただし当該事態は話し手にとって、過去・現在の事態は当然すでに確定しているが、未来の事態であっても間違いなく実現すると了解されているものである。

すなわちそのような動機・行為関係の成立条件を、さらに「観察」という言い方で制約しているということは、その定義の直前に、「従属節事態先行型のルノデ／ルカラの文をみてみると、そのほとんどの文がノデ節、カラ節の事態と主節事態が時間的に非常に接近していることがわかる。」と述べていることによると思われる。要するに、ここでは従属節↓主節↓発話時という意味関係を表すと言っているが、正確には、従属節と主節が同時であること、すなわち従属節⇕主節

↓発話時を含んでおり、そのために従属節がΦの場合も許容されるように考えると考えられる。

それでは、動機・行為関係の範囲のみで、条件節と主節とが時間的に共通部分を持つ場合にこの例外的な構文が成り立つと考えてよいだろうか。しかるに、以下のような原因・結果関係のΦ/タ文で、従属節↓主節↓発話時という時間関係を表わす文も成立する。

(32) a 旱天が続くので、野菜が値上がりした。

b 水位が次第に上がってくるので、ついに堤防が決壊した。

c 風がどんどん強くなるので、堪えきれずに屋根が吹き飛んだ。

これらの場合も、動機・行為関係ではないが、Φ/タという形で従属節↓主節↓発話時という時間関係を表わしている。すなわちこの構文が成立するためには、動機・行為関係を表わす順接確定条件文である必要はないように思われる。必要な条件は、従属節事態と主節事態とが、完全に重ならなくとも、少なくとも時間的な共通部分を持つということに限られるように思われる。

反復される事態にこの構文をとるものが少なくないが、これも従属節が表わす反復事態が主節事態の発生時に重なることによると考えられる。

(33) a あんまりしつこく娘が「頼む／頼んだ」ので、来週の

出張を取りやめた。

b 太郎が何度もお使いを「忘れる／忘れた」ので、お母さんは太郎の手のひらにお使いの品物を書き込んだ。

c 何度も同じような質問を「される／された」ので、発表者は腹を立てたようだ。

2・3 順接確定条件文の特殊例2

―主節が情意述語の場合―

岩崎（一九九三・一二）では、Φ/タで主節↓従属節を表わす順接確定条件文は、従属節が絶対テンスとも相対テンスとも解釈されないことに関して、以下のような議論を展開している。ちなみにここでは順接確定条件節はカラを中心に議論されているが、ノデでも同様の議論が成立すると思われるので、ノデを併記して議論する。

Φ/タという形で、主節↓発話時↓従属節という時間的前後関係を表わす文は、従属節のΦが絶対テンスを表わすとしても相対テンスを表わすとしても不自然ではない。

(34) a 同期の桂子までが来春結婚するから（／ので）、規子は悩んだ。

b セクハラ上司が来月で転勤するから（／ので）。被害者のOL達は喜んだ。

c 娘が今度結婚するから（／ので）、困った。

しかし一方では、以下のような同様の文は不自然になるという。

(35) a *あの彼が来月結婚するから (／) ので、驚いた。

b *語学が自分よりできない男が来年アメリカへ留学するから (／) ので、あきれた。

c *同期の桂子が今度結婚するから (／) ので、規子はあせった。

ここに氏は、主節の述語動詞の意味の違いに注目する。すなわち (34) a ∩ c の主節の述語動詞には「持続性(ここでは継続性)」があり、(35) a ∩ c の主節の述語動詞には「持続性」がないという。そして同様の動詞を以下のように挙げる。

・持続性のない心理変化を表すもの

たまげる、ぎよつとする、面食らう、あきれかえる、びつくりする、あつけにとられる、あせる、おこる

・持続性のある心理状態を表すもの

楽しむ、面白がる、苦しむ、恐れる、悲しむ、うれしがる、おどける

また他方で、主節述語が情意述語でなくても、Φ/タという形で主節↓発話時↓従属節である文が成立することも示す。

(36) 昨日は午後から客が来るから (／) ので、忙しかった。

これらのことから、以下の仮説1を導く。

・ルノデ/ルカラ (従属節事態後続型の条件 (仮説1))

①主節の主語が Agent である。

または

② (その主語が Agent でなくても) 主節の述語が持続性を持つ状態を表す。

さらにこれらの条件の①に関して、「潜在的な Agent がいることが明らかであり、それが主語の位置に立っていない」文も許容されることから、さらに仮説2に修正する。

(37) 来年万博が開催されるから (／) ので、

a 新しく高速道路が建設された。

b 新しく高速道路が完成した。

・ルノデ/ルカラ (従属節事態後続型) の条件 (仮説2)

①主節事態が Agent によって引き起こされたものである。

または

② (①でなくても) 主節の述語が持続性を持つ状態を表す。

後に補足することはあるが、これが岩崎(一九九三・一二)の主たる議論である。ここでまず①に関しては、井島(二〇二一・三、二二・五)で論じたように、順接確定条件文は、原因・結果関係、動機・行為関係、理由・結論関係のおよそ三類に分けられることから説明できるものである。順接確定条件文は、およそ「原因が結果に先行する」原則に従って、従属節が先、主節が後、という時間順序になるのが順当と言うことができる。しかし動機・行為関係のみは、「従属節認識時」が主節以前であればよく、従属節事態が成立するのは

主節事態の後でもよいことを論じた。すなわち主節主語が Agent (動作主) である、あるいは主節事態が Agent によって引き起こされたものであるということは、この条件文が動機・行為関係を表わす条件文であることを意味していると考えられる。

続けて②に関しては、述語動詞の「持続性(継続性)」が問題ではなく、当該の条件文が動機・行為関係と了解されるか、原因・結果関係と了解されるかの違いであると考えられる。概して瞬間的な心理を誘発する因果関係は、原因・結果と了解される傾向にあり、ある程度継続する心理は動作主の意志による操作も可能と了解される場合も考えられ、動機・行為と了解されることになるものと思われる。そして後者のみが主節↓発話時↓従属節という時間関係を表わすΦ/タの形の文が成立する。

以上のように、情意述語が順接確定条件文の主節述語となる場合、原因・結果関係と、動機・行為関係との境界がそこに見いだせるということになるようである。

さらに補足的に論ずべきことが二点ある。

第一点は主節述語が「持続的(継続的)」でない場合であっても、テイル形にすれば自然な文となるということである。(38) a *同期の桂子が今度結婚するから(／)ので、規子はあせった。

b 同期の規子が今度結婚するから(／)ので、規子はあ

せっていた。

岩崎(一九九三・一二)では、瞬間動詞もテイル形にすることによって「持続的(継続的)」になると論じているが、この説明は安易に過ぎるように思われる。本稿では、テイルは瞬間動詞を継続動詞にする働きを持っているとは考えず、動作態とは次元を異にする(動作の進行)(ないし(結果の存続))を表わすアスペクト表現となると考える。したがってここには異なる説明を与える必要がある。一つの説明法として、テイルによって主節は内観的表現とはならず、外観的表現となる。そのために文全体として原因・結果関係を表わすことになるが、その場合も従属節は、動機・行為関係と同じく、「従属節認識時」(「同期の規子が今度結婚する」)ことを知ったから(／)ので(を)を表わすと解釈することになる。もう一つの説明法は、「あせる」はテイルがついて(動作の進行)を表わすと解釈されるのであるから、本来の動作態は(瞬間)であったとしても、(継続)と読み代えられることになり、ひいては「あせっている」が行為と解釈されて、動機・行為関係と了解されることによって自然な文となるとも考えられる。筆者は前者の考えの方がよいように思われるが、いずれにせよ、主節述語をテイル形にすれば許容されることが説明できる。

第二点は、主節述語が瞬間動詞であっても、トイウカラ(／ノデ)を用いれば自然ということに関してである。す

なわち、先の(35) a→cのカラ(ノデ)をトイウカラ(ノデ)にすれば自然な文になる。

(39) a あの彼が来月結婚するというから(ノ)ので、驚いた。

b 語学が自分よりできない男が来年アメリカへ留学するというから(ノ)ので、あきれた。

c 同期の桂子が今度結婚するというから(ノ)ので、規子はあせった。

ここでトイウの他にもソウダ・ヨウダ・ラシイでも同様の議論が可能であり、さらに認識述語「と聞いた」「と伝えられた」「と思った」「と判断した」などでも同様の現象が見られる。いずれも、何らかの行動に先立って、行為者には動機となる何らかの事態が認識されていたことを表わすのである。

この点に関しては、井島(二〇二・五)で論じた。すなわち、順接確定条件節は、条件節が「確定」である表現である。にも拘わらず、(40) aは条件節で「太郎が来る」と述べているのに、続けられた節では「太郎は来なかった」と矛盾する内容が述べられているので不自然となる。それに対して、(40) bは「太郎が来る」と聞いた」こと、より厳密には「……と聞いた」ことは「確定」であっても、「太郎が来る」ことは必ずしも「確定」というわけではないので、続けられた節でキャンセル可能であると言うことができる。ここでは「と聞いた」を補ったが、トイウその他もこれに準じて考えるこ

とができる。

(40) a *「太郎が来る」ので部屋を掃除したのに、太郎は来なかった。

b 「太郎が来る」と聞いた」ので部屋を掃除したのに、太郎は来なかった。

おわりに

筆者はいわゆる「視点の原理」を批判的に検討し、それは結局絶対テンス・相対テンスの仕組みに還元されることを示した。そのうえで、さまざまな複文の類型に関して、それに加わる複文の種類に起因する制約を明らかにしてきた。しかし「視点の原理」で説明のつかない、あるいは絶対テンス・相対テンスに還元できない例外的な現象がこれまでも指摘されてきた。とはいえ例外的な現象があるからといって、これまでの考察を廃棄するのは得策ではないと考えた。そこで本稿では、その例外的な現象の多くが従属節Ⅱ主節という時間関係の場合に生ずることに注目して、ここにはアスペクトなど他の要因が働いている可能性について検討を加えた。

参考文献

三原 健一(一九九一・三)『視点の原理』と従属節時制『日本語

学』第十卷第三号 pp.64-77

三原 健一（一九九二・一）『時制解釈と統語現象』くろしお出版

岩崎 卓（一九九三・一）「ノデ節、カラ節のテンスについて――

従属節事態後続型のルノデ／ルカラー」『待兼山論叢』第二

十七号 pp.19-35, 66-67

岩崎 卓（一九九四・一）「ノデ節、カラ節のテンスについて」『国

語学』第百七十九集 pp.114-103

岩崎 卓（一九九八・四）「連体修飾節のテンス」『日本語科学』第

三号 pp.47-66

大島 資生（二〇〇八・三）「連体修飾節と主節の時間的關係につい

て」『日本語文法』第八卷第一号 pp.101-117

大島 資生（二〇一〇・二）『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ

書房

大島 資生（二〇一・三）「日本語連体修飾節構造の時制解釈につ

いて――修飾節・主節がともにタ形述語をもつ場合――」『日本

語文法』第十一卷第一号 pp.54-70

大島 資生（二〇一四・一）「ソトの關係の連体修飾節におけるテン

スについて」益岡隆志ほか編『日本語複文構文の研究』ひ

つじ書房 pp.197-211

井島 正博（二〇一九・三）「複文のテンス」『日本語学論集』第十五

号 pp.1-11

井島 正博（二〇二一・三）「同一名詞連体節のテンス」『日本語学論

集』第十七号 pp.1-12

井島 正博（二〇二一・三）「条件文のテンス」『日本語学論集』第十

八号 pp.28-46

井島 正博（二〇二一・五）「順接確定条件文のテンス」『国語と国文

学』第九十九卷第五号 pp.85-97

井島 正博（近刊）「同格連体節あるいは引用節を含む文のテンス」

（いじま まさひろ 大学院人文社会系研究科 教授）